

『ルームシェアの恩人』

「登場人物」

- ナギサ 「21」 内気で人の目を気にする。
- ユイコ 「25」 才色兼備の優等生。
- タケシ 「25」 強がり得意地っ張り。
- リノ 「25」 元気な反面寂しがり屋。
- ワタル 「32」 大人で冷静。
- テツロー 「24」 いい加減でゲーム好き。
- ササキ 「40」 薄気味悪い大家。

○家・共有スペース（1日目）

ルームシェア物件の共有スペース。

テロップ「1日目」

ヘッドホンで音楽を聴きながら、リノが来る。

上機嫌に踊っている。

マンガを読みながらタケシが入って来る。

タケシ「（爆笑）このマンガ、ヤバっ！」

ゲーム機を手にテツローが来る。うまくいかずイライラ。

続いてトレイを持ったユイコとナギサが入って来る。

ユイコ「みんな〜お待たせ〜」

ナギサ「（控えめ）お待たせ」

ナギサとユイコ、料理をテーブルに置く。

タケシ、マンガを閉じる。

タケシ「お、待ってました！」

リノ「もう腹減りすぎなんだけど！」

ユイコ、テーブルにカレーライスを置く。

その時、ワタルが帰宅。ネクタイを緩めながら入って来る。

ワタル「ただいま〜」

リノ「ワタルさん、休日出勤お疲れです」

ワタル「やっぱり今日はカレーかあ」

ナギサ「ユイコ特製の野菜スープカレーですよ」

タケシ「おい、早くしてくれー」

ナギサが飲み物を持って来て、一同へ配る。

ユイコ「そんな焦らないですよ」

一同「いただきま〜す！」

一同、カレーを頬張る。満足気な表情。

リノ「（食べて）ん〜ユイコのカレーってホント最高！絶対

教えてくれないのよ、隠し味」

ユイコ「レシピならいつでも教えてあげるって言ってるのに。（

ナギサに「ねえ？」

ナギサ「私も料理できるようになりたいな。ユイコ、今度教えてくれる？」

ユイコ「もちろんよ」

ナギサ「リノも一緒に作ろうよ」

リノ「（ドクターX風）私、もう女子力上げる必要ないので」
タケシ「自分で言うな」

一同、笑う。

一人、テツローだけは一同に背を向けて、ゲームに熱中している。

ユイコ「ねえ、テツローも。早く食べないと冷めちゃうよ？」

テツロー「（ゲームに熱中）いらねえ」

ユイコ「お腹空いてないの？」

テツロー「しつげえな。聞こえなかったのかよ？」

タケシ「ユイコ、そんなヤツ放っておけよ」

ユイコ「でも……」

リノ「フンッ、空気読めないヤツ。何でルームシェアしてるんだろ？」

テツロー、舌打ち。

空気が悪くなる。

ワタルが別の話題を切り出すように、

ワタル「（食べて）うん、さすがはユイコちゃんだ。もしかして、スパイス変えた？」

ユイコ「わかります？　さすがワタルさん」

リノ「ユイコは絶対、料理の道に進んだ方がいいと思うけど」

ナギサ「スゴいよユイコは。何でもできて」

ユイコ「大げさだよ。私は作るのが好きなだけ」

ワタル「『好きこそ物のなれ』って言うじゃないか」

タケシ「何だよ、他にやりたい事でもあるのか？」

ユイコ「やりたい事ねえ……特に考えたこともなかった」

タケシ「ナギサの面倒ばかりで、それどころじゃねえか」

ナギサ「……ごめん」

ユイコ「からかわないの。ナギサ、無理しなくていいんだからね。人にはそれぞれペースがあるんだから。考え方だって人

それぞれよ」

ナギサ「ごめん……」

タケシ「（ため息）お前なあ、すぐにそうやって謝るんじゃないやねえよ。負けを認めることになるじゃねえか」

リノ「ハア？　そう言うアンタはどうなのよ？」

タケシ「俺は、ここぞって時にしか折れない男だ」

リノ「昭和かつ」

タケシ「俺はコイツに男の生き方をだなア」

リノ「はいはい。意味不明」

ユイコ「（微笑）先に食べちゃおう。ね？」

ナギサ「う、うん……」

一同、カレーを食べる。

リノ「……ねえねえ覚えてる？　私が初めてココに来た日のこと。あの夜もユイコのカレーだったんだよ？」

ユイコ「おかわりし過ぎて、お腹壊してたっけ？」

一同、笑う。

リノ「ルームシェアなんてさ、私初めてだったし、最初はホント緊張したなア」

ワタル「僕なんて、一人だけ年上だし、馴染めるか不安だったよ」

リノ「確かに。今でも浮いてる」

ワタル「え、ウソでしょ!？」

一同、笑う。

ユイコ「……いろいろあったよね」

ナギサ「うん……いろいろ……あった。でもホント、みんながいてくれて良かった」

一同、それぞれ思うところがあって……。

リノ「あゝあ、この生活が一生続けばいいのになア」
そこに大家のササキが入って来た。

一同「!」

ササキ、何やらメモをしている。

リノ「あれ？　え？　ササキさん？　なんで？」

ナギサ「こんばんは」

部屋を見回すササキ、ノートに書き込む。

リノ「え、ウソ、無視？」

タケシ「なあなあ、いくら大家だからってよ、勝手に入って来るなんて、非常識だよな？」

リノ「この前なんて夜中に来たのよ。スッピン見られた」
タケシ「そういう問題じゃねえだろ」

ササキ、無言のまま出て行ってしまふ。

タケシ「あっ」

ユイコ「行っちゃった……」

リノ「……ねえねえ、あの人、マジで気味悪くない？」

タケシ「何考えてるかわかんねえし」

一同「……」

テツロー「(ゲームをしながら)おい、お前らに1つ忠告しといてやるよ」

ワタル「忠告？」

テツロー「あのササキって大家、相当ヤバい奴だぞ」

リノ「どういうこと？」

一同「……」

テツロー「この前アイツ、俺に『ゲームの音がうるせえ』ってクレームつけて来やがってよ」

タケシ「そりゃそうだろ。俺たちもかなり迷惑」

リノ「(笑) 同感」

テツロー「まあ聞け。その時、俺もカッとなって言い返したんだよ。そうしたらアイツ、どうしたと思う？ 『文句あるなら出て行け』って、俺の首にナイフ突きつけてきやがったんだ！」

一同「……」

ユイコ「もオ、テツロー。ナイフって、それ本当なの？」

リノ「するならもつと、ヒネツた話してくれる？」

テツロー「ウソじゃねえって！ アイツ絶対に普通じゃねえよ！」

ワタル「変わった人なのはわかるけど、いくら何でも……ねえ？」

ナギサ「私も、悪い人じゃないと思う」

テツロー「お前らはアイツの本性を知らねえだけだ」

タケシ「ならよ、どうしてお前はまだココに残っているんだ？」

そんな事されたら、真っ先に出て行くんじゃないのか普通？」

リノ「そうだよ」

テツロー「それは……他に行く所なんてねえし。家賃も払わなくていいし」

リノ「何それ、意味不明」

テツロー「俺はな、最初から怪しいと思っていたんだ！ 家賃も

光熱費もかからない物件なんて、聞いたことあるか!？」

ワタル「まあ……他では考えられないよね」

リノ「最初はオバケ出るんじゃないかって思ったけど」

ユイコ「そんな言い方、ササキさんに失礼だよ」

テツロー「いいや、アイツには絶対に何か秘密があるはずだ。逃

亡の犯罪者とか!」

ワタル「まさかっ」

テツロー「国際的なテロリストとか!」

タケシ「ゲームのやり過ぎだ」

テツロー「（見直し）どこかに盗聴器でも仕掛けられているんじゃないか!？」

やねえのか!？」

ユイコ「テツロー、気持ち悪いこと言わないでよ」

テツロー「とにかくアイツはだな——」

その時、ササキが再び現れた。

一同「!」

テツローだけは過剰に怯えている。

テツロー「いや、そのササキさん……今の話はほんの冗談で。（

周りに）な？ な？」

ササキ「……皆さん、お集まりのようですね」

ユイコ「ササキさん、どうされたんですか？」

ササキ「急な話で大変申し上げにくいのですが……皆さんには明

日、この家から退去していただくことになりました」

リノ「（理解できず）………ハア？」

ユイコ「ちょっと待ってください！ 退去ってどういうことなん

ですか!？」

ササキ「言葉の通りです」

混乱する一同。

ササキ「こちらの勝手な都合でこのような事態になってしまったことは、大変申し訳なく思っております」

ササキ、一步下がリ一礼。

リノ「え、え……ココから出て行かなくちゃいけないの？ 私たち？ 明日？」

ササキ「冗談を言っているつもりはありません」

リノ「ムリムリムリ！」

ワタル「そうですね！ どんなご事情かはわかりませんが、いくら何でも明日出て行けというのは……」

ササキ「この度、この建物を売却することになりました、新しいオーナーがすぐにも建て直したいとおっしゃっているのです」

タケシ「だからって……いくらなんでも勝手過ぎやしねえか？」

テツロー「やめろって！ お前、俺の忠告聞いてなかったのかよ？」

タケシ「お前は黙ってる！」

一同「……」

ササキ「大変申し訳ございません。しかし、今回のようにこちらの都合で退去していただく場合もあると、入居時の契約書にも記載されていたはずですよ。それを考慮していたからこそ、家賃や光熱費を免除していたのですよ」

ハツとするナギサ、部屋を出て行く。

ユイコ、ナギサを目で追う。

ユイコ「（顔を戻し）ご事情はわかりました。でも、そんな急に言われても、みんな行く所なんてないですよ！」

リノ「そうだよ！」

ササキ「そこは契約にのっるといふことで、ご理解いただけますでしょうか」

一同「……」

そこにナギサが戻って来る。

一同「？」

ナギサ、手に持っていた書類を差し出す。

ナギサ「ササキさんの言うとおり、契約書にも書いてある……」

タケシがナギサから書類を奪う。

タケシ「ハア？ こんな……俺は認めねえぞ！」

リノ「私も！」

テツロー「おい、やめろ！」

一同「……」

ササキ「……それなら仕方ありませんね」

リノ「な、何よ？」

ササキ「皆さんがそういうお考えなら、強制的に出て行ってもら
うまでです」

タケシ「何だと!？」

テツロー「だから、やめろって！」

タケシ「うるせえな！」

ユイコ「やめてよ2人とも！ ササキさん、やっぱり明日なんて
急過ぎますよ！」

ワタル「せめて数日、猶予をいただきたいです！」

ササキ「……弱りましたね」

困惑している一同。

ササキ「……わかりました。ではどうでしょう？ 明日、ココを
退去していただくのは、この中からお1人ということに
してみてもは？」

ワタル「1人？」

ササキ「はい。こちらにも都合があり、急を要するのですが、皆
さんのご事情もふまえ、毎日お1人ずつ、退去してもら
う形を取りましょう」

リノ「1人って……誰が？」

ササキ「それは皆さんの意思で決めてください。民主主義という
ことで」

タケシ「お前、さつきから！」

ササキ、ストップと手で制す。

ササキ「穏やかでないですね……。私は正式な契約に基づいた話
をしているのですよ？ 何かおかしいことを言っていま
すか？」

タケシ「俺は絶対に認めねえからな！」

ユイコ「やめなよタケシっ。ササキさんに言っても仕方ないよ」
タケシ、舌打ち。

一同「……」

ササキ「それでは、私は少し用事を済ませて来ますので、それま

でに、明日出て行くべきだと思っ1人を、それぞれ心の中
で決めておいてください。よろしくお願いいたします」
ササキ、部屋を出て行く。

沈黙……。

リノ「……ねえ何なのアレ！ 私たち、ホントに出て行か
ないわけ？」

ワタル「冗談には聞こえなかったね……」

ユイコ「うん……」

ナギサ「もしかしたら、テツローの言うとおりのかも」

テツロー「だから、俺は最初から言ってるじゃねえか！」

タケシ「ビビッて何も言えねえ奴が威張ってんじゃねえよ！」

テツロー「何だと!？」

ユイコ「やめなよ2人も！ 後でまた、ササキさんに相談して

みようよ。ね？」

ワタル「ああ。ササキさんの言動は何か不自然だ。いくら何でも、
明日退去なんて、どう考えても無茶な話だ」

リノ「バカにすんなっつーの！」

ナギサ「でも、そういう場合もあるって、契約書にも書いてある

わけだし……」

タケシ「何だよ、ナギサはアイツが正しいって言うのか？」

ナギサ「そういうことじゃないよ……ごめん」

ユイコ「タケシ、ホントにやめて！」

テツロー「あゝあ。俺はもうどうなっても知らないね。あとはど

うぞご勝手に」

テツロー、みんなに背を向けてゲームを再開。

リノ「ちよつとアンタさ、いつもそうやって空気乱すのやめて
くれる？」

タケシ「馴染めねえからってよ」

テツロー「こっちはお前らに馴染むつもりなんてハナからねえん

だよ！ 何が仲間だ。気持ちわりィ」

タケシ「お前は一生1人でゲームやってろ！」

テツロー「何だと!？」

ワタル「ちよつとやめよう！」

タケシ「何なんだよ！ どう考えたっておかしいだろ！ 明日出

ていけなんてよ！」

テツロー「俺たちは契約書にサインしちまってるんだぞ？ もう、どうすることもできねえんだよ！ 諦めろ！ フンッ」

ササキがゆっくりと再登場。

一同「！」

ササキ「おやおや、議論が白熱しているようですねえ」

タケシ「お前なあ！」

ユイコ「ササキさん！ 新しいオーナーさんをお願いすることはできませんか？ 退去するのを1ヶ月先に延ばしてもらうとか」

ワタル「お願いします！」

ササキ「こちらの事情は先ほど申し上げたとおりです。それ以上でも以下でもありません。どうしても退去していただけないのであれば……不法侵入ということで、法的措置を取らざるをえませんね」

ワタル「そんなバカな！」

ササキ「でしたら約束通り、出て行くお1人を皆さんで決めてください。こちらも最大限の譲歩をしているんですよ？」

沈黙……。

ナギサ「もう決めるしかないのかも……」

ユイコ「ナギサ……」

ワタル「……そうだね。その人には申し訳ないけど」

リノ「え、それでいいのみんな？」

タケシ「まあ、どうせ出て行く1人なら、決まったようなもんじやねえか」

タケシ、テツローを見る。

テツロー「オ、オイ、汚ねえぞ！」

タケシ「どうなっても知らねえって言ってなかったか？（ササ

キに）なあ、もうさっさと決めてくれよ」

テツロー「おい、ちよっと待て！ なあ——」

ササキ「（遮り）それでは皆さん、準備はよろしいでしょうか？

私の合図で、出て行くべきだと思うお1人を、一斉に指差してください」

一同、緊張して周りを見る。

ササキ「それでは始めます。3、2、1……どうぞ」

タケシが面倒そうにテツローを指差す。

テツローもやり返すようにタケシを指差した。

リノもテツローを指差す。

その他は、躊躇しながらもテツローを指差した。

悔しそうなテツロー。

ササキ「どうやら決まったようですね」

テツロー「ふざけんな！」

ユイコ「ササキさん、やっぱりこんなよくないですよ……」

タケシ「やめろユイコ。誰かが出て行かなきゃならねえんだ！」

一同「……」

ユイコ「……ごめんテツロー」

ナギサ「ごめん……」

ワタル「すまない……」

テツロー「ごめんじゃねえよ！ お前らさっきまで『ルームシエ

ア楽しい』とかほざいてたじゃねえか！ 偽善者面し

やがってよ！ 俺は絶対に出ていかねえからな！」

ナギサ「テツロー、そうじゃないよ」

テツロー「うるせえ！ だいたいお前じゃなくてどうして俺なん

だよ？ この中で一番役に立たねえのは、どう考えたっ

てお前だろうが!？」

ナギサ「……そうだよね、ごめん」

ユイコ「テツロー、そういう言い方やめて！」

テツロー「お前はいつもそうだな！ そうやっていつも優等生ぶ

りやがってよ。そういう態度が前から気に入らなかつた

んだ！」

ワタル「テツロー君、もうよそう！」

テツロー「お前も黙ってる！ いい人ぶって、いつも上から目線

でモノ言いやがって！」

ワタル「別に僕はそういうわけじゃ……」

テツロー「うるせえ！ うるせえうるせえうるせえ！」

一同「……」

タケシ「こりゃダメだ。完全に自業自得だな」

リノ「もう放っておきなよ。決まった後にあれこれ言わないで

ほしいわ」

テツロー「そりやお前は助かるよなあ？ 俺が出て行けば」

リノ「ハア？ 私は困るようなことなんて何もないけど？」

テツロー「俺がいなくなればバレなくて済むからな。夜中にワタルの部屋に入り浸ってんのが」

一同「……」

リノ「あ、あれは……」

テツロー「コソコソしやがってよ。熱心にパパ活ですかあ？」

リノ「ちよっと失礼なこと言わないでよ！」

ワタル「何を言い出すんだキミは！」

ユイコ「テツロー、良くないよ。リノに謝りなよ」

タケシ「腐ってんなお前」

テツロー「どいつもこいつも……何がルームシェアだ！ くだら

ねえ。お前ら全員仲間のフリしてよ、上っ面だけじゃね

えか！」

一同「……」

テツロー「ああ上等だ！ こんなクソみてえな所こっちから出て行ってやるよ！」

ナギサ「テツローっ」

テツロー、ドアを乱暴に閉めて出て行った。

ナギサ「テツロー！」

タケシ「ナギサ、放っておけ」

ナギサ「……やっぱりダメだよこんなの！ ちゃんと話した方が

いいと思う！」

ナギサ、テツローを追って出て行く。

一同「……」

リノ「あゝ清々した。アイツ、何なの？ 超サイテーなんですけど」

ワタル「ササキさん、やっぱりこんな強引な方法は……」

ササキ「何をおっしゃっているんですか？ ルールに基づいて彼

を選んだのは皆さんではないですか。それなら代わりに

あなたが出て行ってもよろしいんですよ？」

ワタル「それは……」

ユイコ「……わかりました。それなら私がテツローの代わりに出

て行きます」

タケシ「ユイコ！」

リノ「こんなところでいい人にならなくていいよ」

ユイコ「だって。ナギサの言うとおりに、良くないと思うの。こういうの」

一同「……」

ナギサが慌てて戻って来る。

一同「！」

ナギサ「み、みんな！」

ユイコ「どうしたの!？」

ナギサ「いないの！」

ユイコ「いないって？」

ナギサ「どこにもいないの！ テツローが！」

タケシ「どういうことだよ？」

リノ「いくら何でも出て行くの早くない？」

ナギサ「それが変なの。テツローの部屋……」

タケシ「変って何が？（リノたちに）おいっ」

タケシ、リノ、ワタルが慌てて出て行く。

ユイコ「ナギサ、落ち着いて」

ナギサ「テツローの部屋、荷物が全部そのままだった……」

ユイコ「そのままって……？」

首を横に振るナギサ。

タケシ、リノ、ワタルが慌てて戻って来た。

タケシ「何考えてんだアイツ？」

リノ「ねえ、これって何かおかしくない？ テツローの部屋、服が脱ぎっ放しだったよ……下着もそのままなんてこと

ある？」

ナギサ「突然、消えちゃったみたい……」

ワタル「消えたなんて、そんなことあるわけないよ！」

ユイコ「ナギサ、怖いこと言わないで」

リノ「ほら、やっぱりおかしいよ！ テツローはどこに行ったの!？」

ワタル「ササキさん、これは一体どういうことなんですか!?! わかるように説明してください！」

ササキ「……さあ。彼がどこへ行ったかまでは、私にはわかり兼ねますが」

タケシ「さあじゃねえんだよ！」

ササキ「彼はそれほどまでに早くココを出て行きたかったのではないですか？ 皆さんからあんな仕打ちを受けたんですから」

タケシ「元はといえば、お前が出て行けとか言い出すからじゃねえか！ 他人事みたいに言ってるじゃねえよ！」

タケシ、ササキに掴みかかる。

ササキ、タケシの手首を掴んで捻り上げた。

タケシ「イテテテテ！」

一同「……」

ササキ「それでは、私は明日の夜9時にまた伺います。それまでに次の候補者を心に決めておいてください」

ササキ、タケシの手を離す。

タケシ「（痛い）クソっ」

ササキ「それでは皆さん、ごきげんよう」

ササキ、部屋を出て行く。

ナギサ「ササキさん、待ってください！」

ナギサ、ササキを追って出て行った。

沈黙……。

リノ「……ねえ、テツローはどうなったの？ 誘拐されたの!？」
ワタル「リノちゃん、そんなことがあるわけがないよ。とにかく今は冷静になろう！」

リノ「だって見たでしょ!？」 テツローの私物、全部残っていたのよ？ あんな大事にしたゲームまで置いていくなんて、絶対におかしいよ！」

タケシ「クソッ、一体どうなってんだよ！」

ナギサが慌てて戻って来ると、別の部屋のドアを開けた。

ユイコ「ナギサ？」

ナギサ「……」

タケシ「オイオイ、今度は何だよ!？」

ナギサ「どうしよう……」

タケシ「何がだよ!？」

ナギサ「ドアが……ドアが開かなくなってる！」

一同「！」

ユイコ「どういうこと!？」

ナギサ「玄関も部屋の窓も、全部開かないの。外からカギがかけられていないみたいで……」

ユイコ「開かないって……」

ユイコとナギサ、急いで出て行く。

一同「……」

タケシ「いったい何なんだよ！」

リノ「ほら、これってかなりヤバイよ！」

ワタル「リノちゃん落ち着こう！」

ナギサとユイコが戻って来た。

タケシ「お、おいユイコ、どうなんだよ？」

ユイコ「ナギサの言うとおり、どこも開かなくなってる……」

一同「……」

リノ「ねえ私たち、ここに閉じ込められたってこと!？」

タケシ「ササキの野郎が何かしやがったんだ！」

ワタル「だとしても理由がわからないよ。ササキさんはどうして

僕らを閉じ込めなくちゃならないんだ？」

リノ「どこか外国に売る気なのよ！ 臓器売買とか！」

ワタル「リノちゃん、それは話が飛躍しすぎだよ」

ユイコ「そうよ。もし私たちを閉じ込めるのが目的だったら、そ

もそもテツローだって退去させようなんてしないわ」

タケシ「そのテツローも仲間ってことは考えられねえか？ 実は

ササキのところにも隠れているかもしれないぞ！」

ワタル「テツロー君が部屋に戻ったのは確かだ。玄関へ行くなら

この共有スペースを通らないといけないし。それを避け

るなら、窓から飛び降りなければならぬ」

タケシ「じゃあ、どう説明するんだよ！ この状況を！」

ワタル「（見回して）テツロー君が言ってたよね。盗聴器がしか

けられているとか……。誰かが何らかの目的で僕らを監

視しているのか？ いや、さすがにそれも考えられない」

ユイコ「ナギサ、ササキさんは確かに玄関から出て行ったのよね

？」

ナギサ「うん。追いかけて……そうしたら、ドアが開かなくなっ
ていたの」

ユイコ「カギは中からしかかけられないのに……」

一同「……」

リノ「ねえ私たち、順番に殺されるの!？」

ユイコ「リノっ」

リノ「だつてさ!」

ユイコ「大丈夫だから。今はとにかく落ち着こう?」

リノ「根拠のないこと言わないでよ! さっきテツローの部屋

を見たでしょ!?! ヤバイよコレ!」

ユイコ「慌てたつていいことないよ。ね?」

リノ「ユイコ、いつもそうやって……偉そうにしないでくれる

? ホント頭くるんだけど!」

ナギサ「リノ違うよ、ユイコはただ……」

リノ「お前は黙ってるよネクラ!」

ワタル「リノちゃん、もうよそう!」

リノ「ワタルさんも、そうやって私を責めるの!？」

ワタル「そうじゃないよ!」

リノ「何なのよ! もう意味不明! (泣)」

一同「……」

タケシ「……なあ、さっきテツローが言ったのは本当か? リノ

とワタルさんつて、そういう関係だったのかよ?」

ワタル「タケシ君っ」

リノ「今はそんなことどうだつていいでしょ! 私たち、ココ

に閉じ込められて——」

タケシ「(遮り)お前、俺とも付き合っていたじゃねえか」

一同「……」

リノ「な、何で今、それ言うのよ!」

タケシ「まあいいか、俺も本気だったわけじゃねえし」

ワタル「タケシ君、キミが考えているようなことは何もないよ。

僕はただ、リノちゃんの相談にのつただけだ」

タケシ「そうやって、いちいち上から来るんじゃないよ」

ワタル「何の確証もないのに一方的に決めつけるなんて、間違っ

ていないか？ それこそ男として恥ずかしくないのか？」
タケシ「何だと!？」

ナギサ「もうやめてよ！」

タケシ「どけ！」

ナギサ、突き飛ばされる。

ユイコ「ナギサ！ タケシ、何てことするのよ！」

タケシ「フンッ、テツローの言ったとおりだな。ルームシェアな

んてよ、所詮はお友達ごっこだな！」

タケシ、自分の部屋へと戻って行く。

リノ「……ホント、みんな勝手」

リノも部屋へ戻る。

ワタル「……ごめん、どうしていいかわからないや」

ワタル、淋しそうに部屋へ戻る。

ユイコ「ナギサ、大丈夫？」

ナギサ、ゆっくりと立ち上がる。

ナギサ「……うん」

ユイコ「ゴメンね、私も何がなんだか……」

ナギサ「どうしてこんなことになっちゃったんだろう……？」

○同・共有スペース（2日目）

テロップ「2日目」

共有スペースではナギサとユイコが心配そうな表情
でジッとしている。

タケシがイライラしながら入って来た。

ユイコ「もう9時になるね……リノたち、大丈夫かな？」

ナギサ「うん……」

タケシ「ビビッて泣いてんじゃねえのか？」

ナギサ「私、呼んで来るっ」

そこにリノとワタルが入って来る。

ナギサ「……」

リノ「泣くのはアンタの方よ」

タケシ、舌打ち。

ユイコ「リノ、大丈夫……？」

リノ「フンッ」

続いてササキが入って来る。

一同、ササキを見て驚く。

ユイコ「え、ササキさん!？」

タケシ「おいちよつと待て！ アンタ、いったいどこから入ってきたんだ!？」

一同「……」

ササキ「どこから……とは？ もちろん玄関ですが」

ユイコ「玄関!? カギがかかっていて、私たちは出られなかったんですよ!？」

ササキ「……いえ。カギは開いていましたが」

タケシ「トボけてんじゃねえよ!？」

ササキ「何だかすごい空気ですねえ」

ワタル「ササキさん、いい加減にしてください！ いったいこの状況は何なんですか？ もう訳がわかりませんよ!？」

ササキ「前にも説明しましたが、新しいオーナーがすぐにでも建替えを——」

タケシ「（遮り）ふざけんな！ 納得のいく説明をしろって言うてんだよ!？」

ユイコ「突然、全員を退去させようとしたり、外へ出られなくしたり……だいたいテツローはどこへ行ったんですか?？」

ササキ「彼は約束どおり退去したんでしょう。後のことは私にはわかりません」

一同「……」

ワタル「（独り言）……誰かが僕らを出て行かせたい……でも、出られない……なぜだ？ 1人ずつ……民主主義……消えた……?？」

ユイコ「ワタルさん……?？」

ユイコ、怪訝そうにワタルを見る。

タケシ「アンタ、いったい何が目的なんだよ?？」

ササキ「弱りましたね……何か誤解されているようだ」

タケシ「誤解だ!？」

リノ「キーキーうるせえんだよ、男のクセに」

タケシ「何だと!？」

リノ「ササキさん、この際、目的なんてどうでもいいわ。面倒くさい。さっさと次の奴、決めちゃおうよ」

ササキ「承知しました」

一同「……」

部屋に緊張が張り詰める。

ササキ「では、皆さん準備はよろしいですか？ 次に出て行くべきだと思うお1人を一斉に指差してください。3、2、

……

その時点で、リノが勢いよくタケシを指差した。

タケシ「！」

ササキ「まだ途中ですが……？」

リノ「いいの！」

タケシ、やり返すようにリノを指差す。

リノ「！」

一同「……」

ササキ「他の皆さんはいかがですか？」

ワタル「いや……」

ユイコ「私は……」

ナギサ「……できません」

ササキ「そういうわけにはいきません。これはルールですから」

ナギサ「できません！」

タケシ「ナギサ、もうこうなったら、出て行く出て行かないの間

題じゃねえ！」

リノ「ナギサ、ユイコ、お願い！ タケシを指して！」

一同「……」

ナギサ「無理よ……。ねえ、もっとみんなで話し合っただけよ

よ。これじゃ、みんなバラバラになっちゃう！」

ユイコ「そうよ。これじゃ、お互い嫌な気分のままだわ！」

ナギサ「私たち、今まで仲良くやってたよね？ みんなで行った

キャンプだってホントに楽しかった！ ねえ、こんなの

嫌だよ！」

タケシ「結局、コイツらは自分のことしか考えてなかったってこ

とだ。善人のフリしてな。諦めろ。ルームシェアなんて、

そんなもんだったんだよ！」

ナギサ「そうじゃないよ！ みんなでこうやって共同生活して私……本当に心強かったし」

タケシ「ンなもん俺は知らねえよ！」

リノ「自分のことしか考えてないのはタケシでしょ！ 掃除当番だって、全部ナギサにやらせてたくせに！」

ナギサ「それは……いいよ、好きでやってたんだから。みんなにはいつも助けてもらってるし。私、学校で嫌なことあったでしょ……？ だから、みんなとこうやって暮らせて、たくさん助けられたし、たくさん教えてもらった。だから、心から感謝してるの。こんな私を仲間に入れてくれて」

リノ「偽善者たちに感謝するなんて、アンタ相当幸せね」

ナギサ「リノにも感謝してるよ！」

リノ「はいはい。みんな、空気読んで本音隠してさ。ううん、本当は言いたいことも言う前に全部ナシにしちやっってるんだよ。嫌われたくないから。本音も言い合えないなんて……それが仲間って言える？」

ユイコ「私はそこまで悪いことだと思わないわ。そうやって相手を思いやる気持ちって大切だよ。言いたいことだけをぶつけ合っても、解決できるとは限らないわ」

リノ「はいはい。優等生のベストアンサーね。やってらんないわ」

ナギサ「みんなで助け合っていくことはできないのかな……？」
タケシ「だから、お前は自立できねえんだよ」

リノ「全部ユイコの言いなり。あく情けない」
ナギサ「私だって人任せにしてたわけじゃないよ！」

リノ「だったらいいこと教えてあげる。アンタの憧れのユイコちゃんはね、タケシと――」

ユイコ「(遮り)リノ！」

沈黙……。

タケシ「……おいおい、そんな昔の話、持ち出すんじゃないよ」
リノ「まあ、同じ屋根の下に男と女が暮らしてるんだから、間違いは起きるか……なんか寂しいね、人間って」

ユイコ、俯く。

ナギサ「ユイコ……?」

ユイコ「……」

リノ「(爆笑) ナギサ、悔しいでしょ? ムカつくでしょ?

ほらっ、憧れのユイコちゃんを奪ったタケシを差しなよ

!」

沈黙……。

ユイコ「(顔を上げ) ……言いすぎだよ」

ユイコ、厳しい表情でリノ(正面)を指差した。

ナギサ「リノ……そういうのはよくないと思う」

ナギサもゆっくりとリノ(正面)を指差した。

リノ「ウソ……」

タケシ「(爆笑) ウケる! こいつ自爆しやがった!」

リノ「ちよっと待ってよ! 2人とも恨みがあるのはタケシじ

ゃない! どうして私なの!？」

ササキ「どうやら、残りの選択を待たずしても決まったようです

ね」

一同「……」

その時、ワタルが大きく息を吐いた。

ユイコ「ワタルさん……?」

ワタル「そうか……」

ナギサ、タケシ、リノもワタルを見る。

ワタル「共同生活……助け合い………そういうことですか、サ

サキさん」

ササキ「さて、何のことでしょうか?」

リノ「ねえどういうこと!？」

ワタル「リノちゃん、もうよそう。きっとこうなることは最初か

ら決まっていたんだ」

リノ「決まってたって何よ? ヤダ……意味不明。嫌よ。私、

怖い!」

ワタル「ああ。だからキミを1人では行かせないよ。僕も一緒だ」

リノ「え……」

ワタル「ササキさん、それでもいいですよね?」

ササキ「私は構いませんが」

ユイコ「ワタルさん……」

ササキ「それでは私はこれで。ごきげんよう」

ササキ、ゆっくりと部屋を出て行く。

ワタル「リノちゃん、キミは今まで本当によく頑張ってくれた。

この家のムードメーカーとして、いつも明るく振る舞ってくれた。キミの元気や笑顔に救われたのは僕だけじゃないはずだよ」

リノ「でも、私……」

ワタル「大丈夫。僕がついてる。怖いことなんて何も無いよ」

リノ「ワタルさんは、怖くないの？」

ワタル、震える自分の手を押さえる。

ワタル「正直言えば、僕だって怖いさ。でも、そうするべきなんだ。

これは、ココにいるみんなのためでもあるんだから」

タケシ「ちよっと待て！ 俺たちのためだと？ さっきの……」

最初から決まっていた』ってどういうことだ!？」

ワタル「それは………言えない」

タケシ「何だと！ それで勝ったつもりか!？」

ワタル「勝ち負けじゃない！ これは1人1人がちゃんと気づくべきなんだ!」

ユイコ「ワタルさん……」

ワタル「リノちゃん……さあ」

ワタル、リノに優しく手を差し出す。

リノ、ワタルの手を取る。

リノ「ナギサ、ユイコ……（泣）……さっきはごめん
ユイコ「……ううん」

ナギサ「私こそごめん、力になってあげられなくて……」
ワタル「みんな……長い間、本当にお世話になりました」

リノとワタル、一歩下がって深くお辞儀をする。

ワタル「ナギサちゃん」

ナギサ「……」

ワタル「キミならきつと大丈夫だよ」

ナギサ「……はい」

ワタルとリノが出て行く。

沈黙……。

ハッとすするナギサ、ワタルたちを追って出て行く。

ユイコ「……いったいどうなってるの？」

タケシ「わかったら苦労しねえよ」

ナギサ、暗い表情で戻って来る。

ナギサ「やっぱり2人ともいない……テツローみたいに」

ユイコ「どうして……」

ナギサ「ドアもまた開かなくなってる……」

タケシ「クソ、決まりだな。やっぱりササキが全員殺したんだ！」

ユイコ「殺したなんて言わないで！」

タケシ「そう考えれば辻褄が合うじゃねえか！——ったくよ！」

ユイコ「リノとワタルさんがいなくなったのは、ササキさんが出て行った後じゃない！ タケシ、そういう無責任な発言

やめてよ！」

タケシ「逆に礼を言っただけ。アイツらの化けの皮が剥がせたんだ！」

ユイコ「言っただけの事と悪い事があるわ！」

タケシ「人の顔色伺いながら生きろってか？ ナギサみてえに。

俺はごめんだね。妥協ばかりしてるコイツを見てるとイ

ライラすんだ！」

ナギサ「私は人と争うのが嫌なの……」

タケシ「お前にはプライドってものがねえのかよ!？」

ナギサ「争うなら私は譲る。プライドなんて邪魔なだけよ」

タケシ「言い訳だけは達者だな。フンッ」

タケシ、不貞腐れた表情で自分の部屋へ戻る。

ユイコ「……ナギサ、私もそれは違うと思う」

ナギサ「（驚く）……ユイコ？」

ユイコ「どうしても、心からほしいものができた時、ナギサはそれも譲るつもり？ 簡単に諦めちゃうの？」

ナギサ「（困る）……それが人のためなら、私は次でいい」

ユイコ「次なんてなかったら!？ たった1つの大切なものを手にするために、手を伸ばさなきゃ掴めない時だってある

よ！」

ナギサ「そんなこと、私なんか望んじやいけない——」

ユイコ「（遮り）誰だっていいの！ 望んでいいの！ 『これは自分のものだ』譲りたくない』って叫んでいいの！

ナギサはナギサなんだから！」

ナギサ「ユイコ、私……」

○同・共有スペース

テロップ「3日目」

神妙な面持ちのナギサとユイコ。

タケシは不満そうな表情。

ササキが一同を一瞥した。

ササキ「それでは皆さん、準備はよろしいでしょうか？」

ユイコ「……ちよっと待ってくださいササキさん」

ササキ「どうされましたか？」

ユイコ「次は……私が出て行きます」

タケシ「ユイコ！」

ユイコ「だからせめて、どうしてこんなことになったのか、本当の事を教えてください！ テツローとリノ、ワタルさんは、いったいどうなったんですか？」

ササキ「……それは私にもわからないですよ、本当に」

タケシ「それじゃあ説明になってねえだろ。ワタルのやつが言っ

てた『最初から決まっていたこと』って何だ？」

ササキ「……さあ、何のことでしょう？」

タケシ「アンタいい加減にしろよ！」

ユイコ「私たちをココに閉じ込めて、こんなことするなんて、どう考えても普通じゃありません！」

ササキ「閉じ込める？ 前にもそんなことをおっしゃっていましたが、いったい何のことですか？」

ユイコ「だって、ドアに鍵をかけて私たちを……」

ササキ「私には身に覚えがないことですね」

ユイコ「……ナギサ、そうよね？」

ナギサ、困惑した表情で俯く。

タケシ「おい、どうした？」

ナギサ「……」

ユイコ「ナギサ？」

タケシ「……お前、何か知ってるな？」

ナギサ「ち、違うの！ これには理由があつて！」

ユイコ「どうして……？」

タケシ「そうだ、思い出せユイコ！ テツローの時も、ワタルと

リノの時も、部屋を最初に確認したのはコイツだ！ コ

イツが鍵をかけやがったんだ！」

ナギサ「違うの！ 聞いて！」

ユイコ「ナギサ、どういうこと？ 本当の事を教えて」

ナギサ「私はずっとみんなが羨ましかった……自分の言いたいこ

とを素直に言えて」

タケシ「答えになつてねえんだよ！ お前、何なんだ!? 俺たち

を裏切ったのかよ!？」

ナギサ「違う！ 私は、みんなと向き合うことがどうしても必要

で……。それでササキさんに相談したの。でも、こんな

ことになるなんて思ってもみなくて！」

ユイコ「ササキさんに相談……？」

ササキ「ナギサさん、余計な発言は慎んでください」

ナギサ「もつとちゃんと話し合うべきだった……テツローとも、

ワタルさんやリノとも。ああ、やっぱり私はダメな人間

だわ……またみんなに迷惑をかけちゃった」

急に震え始めるナギサ、頭を押さえて苦しそう。そ

してその震えが徐々に激しくなる。

ユイコ「ナギサ!？」

タケシ「ど、どうした……？」

震えているナギサ、発作が起きる。

ナギサ「(リノの口調)意味不明！ (テツローの口調)バレな

くても済むからな。夜中にワタルの部屋に入り浸ってい

るのが！ (ワタルの口調)きつとこうなることは最初

から決まっていたんだ！ (リノの口調)意味不明！」

一同「……」

ナギサ「(息が荒い)みんなを受け入れなきゃ、私はみんななん

だから！」

タケシ「おい、どうしたんだよ!? 訳わかんねえこと言ってんじ

やねえよ!！」

ユイコ「ナギサ!！」

ナギサの震えが次第におさまってきた。

ユイコ「（心配）……ナギサ、大丈夫!？」

沈黙……。

ナギサ「う、うん……ごめん」

ユイコ「……あなたまさか」

長い沈黙……。

ユイコ、何かを悟り、大きく息を吐く。

ユイコ「……そっか。ササキさん、もう始めてください」

タケシ「おい、まだ話は終わってねえだろ！」

ユイコ「いいの」

タケシ「よくねえよ！」

ユイコ「いいの！」

タケシ「どうしたんだよユイコ！」

ユイコ「ササキさん、よろしくお願いします」

ササキ「それでは皆さん、出て行くべきお1人を一斉に指差して

ください。3、2、1……どうぞ」

タケシは「ふざけんな」とナギサを指差す。

ナギサはためらいつつもタケシを指差した。

タケシ、舌打ち。

ユイコ、ゆっくりと自分を指差す。

タケシ「ユイコ！」

ユイコ「……ごめんタケシ。私も何となくわかつちやった……。

ササキさんをはじめから言ってくれたら良かったのに」

ササキ「目的を遂行するには、時にはこうした力技も必要なん

です」

タケシ「おい待て！ 目的って何だよ!？ お前ら何を言ってんだ

!？」

ユイコ「もういいのよ。タケシもナギサを認めよう？ これは、

私たちにも必要なことなの」

タケシ「認めるだど？ バカいうな。勝つのは俺だ！」

ユイコ「ワタルさんはそれを理解して受け入れた。リノもテツロ

ーも、最後には受け入れたはずよ」

タケシ「どうして俺がコイツに譲らなきゃなんねえんだ！」

ユイコ「それなら私がタケシを指すわ。そうしたら2対1よ？

でも、それじゃ意味ないのよ！ ナギサ、そうでしょ？」
ナギサ「私、もうどうしていいか……」

ユイコ「ササキさん、改めてお願いしてもいいですか？」

タケシ「（弱気）お、おい……」

ササキ「はい、それでは再度お願いします。3、2、1……どうぞ」

ユイコ、自分を指差す。

ナギサ、ゆっくりとタケシを指差す。

タケシ、震えながらナギサを指差す。

ユイコ「タケシっ」

タケシ「嫌だね！ 俺は……（言葉が詰まる）。ナギサ、お前が

学校でイジメられていた時、助けてやったのは誰だ？

俺だろ!? 落ちこぼれだったお前に勉強を教えたのはユ

イコだろうが？ そんな俺たちをあっさりと切り捨てる

のか!? お前はそういう奴だったのかよ!？」

ナギサ「みんなには本当に感謝してる！」

タケシ「頼むよオ。な？ 許してくれよ！ またみんなで楽しく

やろうぜ！ そうだ、キャンプ行きたいって言ってたよ

な!？」

ユイコ「タケシ……ここぞって時に折れるのが、男なんでしょ？」

タケシ「……チクシヨオ」

ユイコ「……ナギサ、はっきり言って。あなたからその言葉を聞

きたいの」

ナギサ「え、それは……言えないよ」

ユイコ「（力強く）言いなさい！」

ナギサ「!」

ユイコ「（優しく）今、手を伸ばさなきゃ」

ナギサ「う、うん……。わ、私は……私はこれから……1人で生

きていきます。みんなの助けは……（泣）……もう必要

ありません」

ユイコ、優しくナギサの頭を撫でる。

ユイコ「……偉いぞ。よく言った」

タケシ、再び勢いよくナギサを指差した。

ユイコ「タケシ……」

タケシ「……クッソオオオオオオオオ！」

タケシ、震えながらナギサに向けた指をゆっくりと
自分に向けた。

タケシ「負けたわけじゃねえからな!? ナギサ、絶対に何とかし
ろよ！ 自分でだぞ!? いいな!?」

ナギサ「（泣）うん！ タケシ、わかった！」

ナギサ、泣きながら何度も頷く。

ユイコ「（微笑）ねえナギサ……本当に美味しい料理はね、隠し
味なんかいらなんだって」

ナギサ「……」

ユイコ、我慢していたが泣いてしまう。

ユイコ「（泣）……楽しかったね、ルームシェア」

ナギサ「（泣）……ユイコ、タケシ、ありがとうございます！」

ユイコ、ゆっくりと部屋に戻る。

タケシ、肩を落とし、部屋に戻る。

ナギサ「（泣）ありがとうございます……みんな……みんな私の恩人よ！」

○病室・一室

テロップ「数日後」

白衣を着たササキと、中年女性（ナギサの母親）が
話している。

母親「ササキ先生、ウチのナギサは、もう大丈夫なんですよ
か!?!」

ササキ「（微笑）はい。娘さんは本当に頑張りましたよ！」

母親「（泣）ありがとうございます！ 本当にありがとうございます
います！」

ササキ「……現代の子どもたちは我々が思っている以上に生きづ
らい世の中を生きています」

○同・病室

無機質な空間。

中央にベッドがあり、ナギサが眠っている。

ササキN 「絶え間なく飛び込んでくる膨大な情報は、彼らに休む間を与えません。そんな環境にウイルス問題が拍車をかけてしまった……」

ナギサが目を覚ました。

ササキN 「ストレスから逃げた彼女が悪いのではなく、逃げるほどのストレスを与えた社会に原因があるのです。その社会を作っているのは、我々大人なんですよ」

顔を上げるナギサ、晴れやかな表情だ。

ササキN 「……解離性同一性障害、いわゆる多重人格障害は心の防衛反応です」

ナギサ、ゆっくりとベッドから起き、窓を開けた。

ササキN 「今回の人格統合もユイコ、タケシ、リノ、ワタル、テツローといった5つの人格をナギサさんが理解し、尊重し、受け入れ、前向きに生きてゆこうと決意してくれたからこそうまくいったのです」

ナギサの背後にユイコ・タケシ・ワタル・リノ・テツローの幻想が現れる。

一同も優しい表情でナギサを見守っている。

ササキN 「これからは、我々大人が彼女の自立をサポートしていきます。私も全力でお手伝いします！」

ナギサの決意に満ちた表情。

「終」